

6-9					
主題	信頼関係をつくるためのコミュニケーションの重要性				
副題	3つの実習の学びから				
キーワード 1	介護実習	キーワード 2	信頼関係	研究(実践)期間	15ヶ月
法人名・事業所名	学校法人 敬心学園 日本福祉教育専門学校 介護福祉学科				
発表者(職種)	並木 瑠奈(2年生)				
共同研究(実践)者	西村 圭司(介護福祉学科専任講師)				
電話	03-3982-2511	FAX	03-3982-5133		
事業所紹介	本校は新宿区高田馬場の本校舎と豊島区高田の高田校舎にて、介護福祉士、社会福祉士、精神保健福祉士、言語聴覚士、手話通訳士、音楽療法士を養成している。介護福祉学科は1988年4月に設置され、「一歩先行くユニークな学び」などのサポート力を土台に教員と共に実践力を身につけ、自己実現を目指している。				

《1. 研究前の状況と課題》

介護福祉士養成校では1850時間のカリキュラムのうち450時間は介護福祉現場での介護実習である。本校介護福祉学科の介護実習は、2年間で3段階に分けて行われる。本学科の実習Ⅰは、早期に現場実習体験ができる「EEP」(アーリーエクスポージャープログラム)を取り入れていることが最大の特徴である。1年生の1年間の授業期間中に、20日間の実習を5日間ずつに分けて週に1回ずつ行い、それを4つの実習施設で体験することで、1年生終了時点ですでに4種類の実習施設を体験できることにより、自分自身の適性も少しずつ見えてくるというメリットがある。しかも入所型施設だけでなく、在宅系の実習先も豊富で、様々な実習先で様々な利用者と関わることが可能である。1年生の2月春休みの実習Ⅱは、初めての連続実習で、特別養護老人ホームや介護老人保健施設など入所型施設において、12日間行われる。ここでは主に、色々な介助を学んだり、介護過程は対象利用者の情報収集を適切に行われるかが目的となっている。2年生の夏休みの実習Ⅲは夜勤も含む25日間行われる。ここでは、対象利用者の情報収集をもとに生活課題を導き出し、分析統合化し、計画を立案し実施するという、適切な介護過程の展開が主な目的となっている。学校で学んだ介護技術やコミュニケーション技術などを土台として、実習現場の指導者や職員の皆様の指導の下、より個別的な介助実践や、介護過程の展開ができるようになるためには、何が大切かを考えることを目標とする。

《2. 研究の目的ならびに仮説》

適切な利用者の情報収集や個別的ケアを実践していくために重要なことは何かを学ぶ。このためには一人ひとりを「よく知る」ことが大切で、知るためには関わること、コミュニケーションが重要ではないかと考えた。

《3. 具体的な取り組みの内容》

介護実習Ⅰでは、放課後デイを含んだ障害者訪問介護・障害者作業所・小規模多機能型居宅介護・特別養護老人ホーム（以下特養）で臨んだ。初めての实習で知らない方の生活に関わりコミュニケーションを図っていくということで、不安や戸惑いの中での実習だった。まずは利用者を知ろうとお話したり、一緒に同じメニューのご飯を食べたり、一緒にゲームを楽しんだりして距離を縮めていった。話しかけても反応が返ってこなかったりしたこともあったが、積極的にコミュニケーションを図った。介護実習Ⅱと介護実習Ⅲは特養で臨んだ。実習Ⅱは、初めての連続実習だった。前日も会った利用者から「あら？誰かしら？誰かのお孫さん？」と聞かれ落ち込むこともあったが、毎日挨拶したり、何気ない会話を重ねていくと、「今日も来てくれたのね。待っていたよ」と覚えていただけのようになった。また、一緒に時間を多く共有することで、最初は「あなたとは一緒にやりたくない」とおっしゃっておられた方も、だんだんと「一緒にやろう」と言うようになってきた。最終日に挨拶をしたら、「話し相手がずっといなくて寂しかったけど、あなたがいたから楽しかったよ、ありがとう。大好き！」と手をギュッと握って御礼を言うてくださった。実習Ⅲは、より多くの介助をさせていただき学ばせていただけた。全ての利用者に同じ時間分コミュニケーションを図ることは難しかったが、介助中でも声掛けなどのコミュニケーションを図ったり、配膳の時も「〇〇さんの好きな△△ですね」と一言添えてお渡ししたり、限られた時間の中で多くのコミュニケーションを図った。介護過程の利用者はコミュニケーションから多くの情報収集をしたいと思い、多くの時間を共有したくさんお話した。そうしたら「昨日はねーちゃん来なかったね、次はいつ？」とか「ねーちゃんにしかこんなこと言えないよ」と言うてくださった。こうしたやり取りから得た情報をもとに、「生活へのメリハリをつける」という生活課題を導き出し、敷地内にある売店へ買物に出かけるという計画を立案し実施した。また気管切開で声が出ない方には、こちらから積極的に声掛けして、「聞いてくださりありがとうございました。××さんに話すとスッキリします」と感謝の気持ちを伝えたり、一緒に好きなテレビを見たりして距離を縮めていった。すると最終日、ロバクで「ありがとう」と言い泣いてくださった。

《4. 取り組みの結果》

不安でいっぱいだった最初の実習Ⅰでは、利用者と少しでも距離を縮めたいという思いで積極的にコミュニケーションを図った結果最後には「素敵なお介護福祉士さんになって、いつか会いに来てね」と言うていただけた。実習Ⅲでは特に介護過程対象利用者と直接多く関わりを重ね、「お出かけ」の計画を実施したことに対し、「楽しかった」と笑顔を見せてくれた。最終日は「ねーちゃんがいてくれて幸せだったよ、ありがとう」と泣いてくださった。

《5. 考察、まとめ》

利用者を知るには信頼関係の構築が何より重要だと分かった。それには利用者の隣で同じ時間を一緒に多く共有することが必要で、会話だけでなく、目を見て挨拶するなど非言語コミュニケーションも意識しながら、利用者と同じ気持ちになることが大切で、この積み重ねで信頼関係も構築されると考えた。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究に利用者及び実習施設が特定できるような情報は使用していない。

《7. 参考文献》

「最新介護福祉全書4・コミュニケーション技術」メヂカルフレンド社 松井奈美編

《8. 提案と発信》

様々な実習先でたくさん学ぶことができました。ありがとうございました。